

第6回仏教図書館協会研修会 10月11日(木)

講演1 「日本近世の大蔵経出版について」

佛教学部文学部助教授 松永知海

はじめに

釈尊は大医王なり、と經典に説かれている。それは人間の心の苦しみを直してくれる姿が、身体の病気を直してくれる医師の姿にかさなるからである。仏が医師であれば、八万四千といわれる法門は法薬といわれ、医師の処方箋にある薬である。僧侶は看護人となって、患者である衆生(生きとし生けるもの)を手助けする。患者である私たちが薬を飲むか飲まないか、それは一人ひとりの個別の問題ということになる。釈尊の説法は応病与薬とか対機説法とかという言葉で表わされる。医者(病状によって薬を与えるが、名医は同じ病状でも子どもにはあまい口当りのよい薬を出し、体力ある大人には苦くてもよく効く薬を処方する。機根(相手の理解能力)に対して法を説くという所以である。そして、釈尊がお亡くなりになられる時、弟子阿難に対して、これからは自らを依り所とし、法を依り所として修行に励みなさいと語られたという。仏法と人との関係は「人は法をよりどころにし、法はそれを信じる人を得て弘まる」ことになる。

さて、釈尊の説法は応病与薬、対機説法で個別的であるから、仏滅後は教団として普遍的にまとめる必要があった。仏法の編纂である。これを「結集」(けつじゅう)と呼んでいる。釈尊が亡くなられて直に第1回が開かれ、その後3回行われたと言う。このことは逆に教団が複数のグループに分れていたことを意味する。それらのグループにはそれぞれ釈尊が説かれた説法(教法)と釈尊が説かれた戒律(教誡)と釈尊が説かれた教えの解釈

という三つのよりどころを持っていた。いわゆる三蔵といわれる経蔵、律蔵、論蔵のことである。三蔵が基となり大蔵経の編纂がなされた。

一、高麗版大蔵経と中世日本

韓国では顕宗(1010-1031)が契丹を撃退する祈願で、一〇一一勅をもって大蔵経の出版を命じ、はじめて大蔵経が雕造された。蒙古族侵入の折焼かれてしまったが、さらに高宗は仏力によって蒙古を折伏するため二三年(1236)に再雕を發願、三八年(1251)に完成し、再び大蔵経が雕造された。現在世界文化遺産として登録されている高麗版大蔵経がそれである。二度目であるから初雕本にたいして再雕本といい、またその版木枚数が八万余枚あることから、八万大蔵経とも呼ばれている。

では日本はどうであったのだろうか。たとえば元寇の時は退散祈願で仏像を造ったり、祈禱が行われたり、「四天王を信じれば、国を守る」という功德を説いた「金光明経」が写経され、四天王像に納められていたなどの事実が解っている。守りを固める土嚢を積んだり、軍隊の装備に国家の主力が注がれたのであろう。同じ蒙古の襲来にあたり、対応の違いが際立っている。

さて、日本の中世において大蔵経の出版の試みが全くなかったか、といういくつかの事例が明らかにされている。

①行円上人が弘安年中(1278-1287)勅を奉じて一切経の雕造を企てたが、その功を果たせず正安二年(1300)亡くなった。彼の弟子

智円は、行円の三回忌に、浄土三部経と五部九巻とを出版し、その題跋に先師の志願を述べている。

②相州靈山寺沙門宝積・如心・寂慧等が先師宴海発願のあとをついで今上皇帝・大皇太后・皇太后の聖寿祝延と関東大將軍家の息災延命と国泰民安のために大蔵印板を開鑿するという弘安十年（1287）九月の題記がある。伝法正宗記（南禅寺蔵）巻首などの刊記にそのことが書かれている。（図版1）また、記録としては貞和元年（1345）十一月十四日兵部丞源定規が一切経開版の業績によって臨時の任官が行われたことや、鎌倉の松谷寺で一切経の開版事業が始められたことが足利直義の智通上人に送った書状にあるという。これらは、いずれも大部な刊行ではなく、大蔵経刊行の発願があったという事実以上のものではない。やはり大蔵経の出版には莫大な資金と綿密な計画性がと必要であり、日本では期が熟していなかったとみるべきである。

幕府においては、機会あるたびに高麗の大蔵経の輸入を企てている。明の南北蔵経は勅版であった上、海上運搬の不安もあって、その輸入は難しかった。宋元版の舶載にくらべて明の南北蔵経の渡来のないのは、専ら高麗蔵を求めたからといわれている。高麗版大蔵経、あるいは高麗経由の中国からの大蔵経の輸入があったことは、日本に遺存する大蔵経からいえるが、記録の上からは足利義満の代から義澄までの約百年間に八十回もの請蔵があって、約半数が将来されているという。また足利義持は、応永三〇年（1423）とその翌年に僧を遣わし、高麗版大蔵経の板木をゆずりうけたい、と望んだが拒否されている。

二、近世の大蔵経

近世になって、大蔵経の印刷をはじめた僧が現れた。宗存がそれである。彼は朝鮮の高麗版を底本に經典の出版をはじめた。大正天皇の御即位を記念してはじめられた京都大蔵会においてその存在が知られ、第六回大蔵会で出版に際しての「勸進状」が展示されてその出版が確認された。昭和三十五年齋藤彦松という人は比叡山延暦寺慈眼堂の土蔵にあった木活字をこの宗存版の木活字だと発表し

た。実は慈眼堂＝天海僧正をお祀りしている御堂、そこでそれまで天海版の木活字だといわれていたものであった。滋賀県の教育委員会の調査がはじまり平成七年から文化庁の文化財調査の結果、これは宗存版の木活字約十七万個であると認められ、平成十二年十二月二十日に国の重要文化財に指定された。

その天台沙門聖乗坊宗存は伊勢高日山常明寺の住僧であって、慶長十八年（1613）正月に伊勢神宮内院常明寺に摺印一切経の奉納を発願し、京都北野経王堂においてその事業に着手した。このことは願文や『一切経開版勸進状』からわかるが、彼の伝記はもちろん生卒年すら分かっていない。慶長一十九年九月には建仁寺の高麗版大蔵経によって『大蔵目録』三帖を出版予定の目録として刊行し、これに発願文をおさめた。その奥書きに、

戊申年高麗国大蔵都監奉勅彫造一代蔵経、開梓摺写報仏恩徳、結縁衆生同証
仏果二世安楽、乃至法界平等利益。大本願伊勢聖乗坊宗存（花押）

慶長十八癸丑年九月吉日於洛陽梓之。

当施主開版 吉野入道意齋西田勝兵衛尉
く戊申高麗高宗三五年(1248)（第六回大蔵会展観目録大正九年十一月）

とあって、慶長十八年（1613）にまず『麗蔵』の目録を和刻にして出版した事がわかる。この開版の施主西田勝兵衛は寛永（1624-1644）から寛文年間（1661-1673）まで京都寺町二条下ル妙満寺前にあった書肆であり、常明寺については『伊勢参宮名所図会』（寛政九年刊行1797）に、つぎのようにいう。

常明寺、高日山法樂院といふ。間の山より北にあり。当所第三の大寺なり。

本尊薬師にて天台宗、額は後陽成院御宸翰、本堂並山門等巍巍たり。聖徳太子の建立ともいふ。按るに此地尾部陵の所に方角相応して、いにしへ尾上寺又は泉寺又天福寺などいひしも此寺の事なり。尾部坂にあるより尾上寺といふ。あか井の清水ありしより泉寺の名あり。其後廢せしを再興して天福寺といひしは是天福年中再興の故なり。今は松垣家常明再建せしより常明寺といへり。

版式は、一行一四字詰め二二行、ないし一

行一七字二三行で、はじめの糊しろのところ
に経論名、巻数、枚数、千字番号を細字で刊
記し、巻末に、「(甲寅など干支) ○○歳大日
本国大蔵都監奉勅彫造」と刊記がある。

これは高麗再雕本の形式に倣うもので、違
う処は整版でなく、文禄慶長の役によって朝
鮮から伝来した新しい技術の木活字印刷によ
るもので、折帖に装幀した点である。慶長末
から元和をへて寛永のはじめに至る前後十余
年にわたる出版であるが、元和四年(1618)
以降の刊記には「奉勅彫造」の文字がみえな
くなり、刊行の仏典の種類も大蔵経から天台
宗の章疏や一般書に変わっていく。当時は後
水尾天皇の御代であるが、後陽成上皇の在世
であった。上皇は元和三年(1617)八月二六
日、47歳で崩御となった。このことが刊記か
ら「奉勅彫造」の文字が消える理由であろう
といわれ、現在一四〇部が現存している。最
後は寛永元年(1624)十一月十日の『法苑珠
林』巻八一である。以後の出版がない理由は
不明であるが宗存が示寂したためであろうと
考えられている。その宗存版を天海が所持し
ていたことが明かとなっている。

『大蔵目録』三卷(日光山輪王寺天海蔵)

『顕戒論』元和三刊(1617)

『正因果集』元和四刊(1618)

『妙法蓮華経〔抄〕』元和七刊(1621)

『源信枕雙紙』同上

『法華経品釋』同上

『無量義経〔卷釋〕』同上

『法苑珠林』元和七刊(1621)から寛永元
年刊(1624)

『天台四教儀』元和九刊(1623)

小山正文氏は『法華玄義科文』(龍谷大学
所蔵)巻一之一見返しに「前大僧天海寄進」
墨書や蓬左文庫所蔵五帖九帖の宗存版が尾張
徳川家義直(1600-1650)の蔵書であったこ
を示す「御本」印が押されているが、元来
それは父家康旧蔵のいわゆる「駿河御讓本」
であったらしいと推定し、ここに宗存-天海-
徳川家の関係も考えられて興味深いものが
あろう、と述べている。

山科の毘沙門堂経蔵調査でこれを裏付ける
宗存版が見つかった。毘沙門堂はもともと出
雲寺とよばれ左京京極出雲路にあり毘沙門天

がまつられ、人々の信仰を集めていた。それ
が近世になって廃絶していたのを慶長年間の
末に後陽成院から天海へ毘沙門堂の号を賜わ
り、寺を再興することを命じられた御寺であ
る。天海(1643没)が亡くなるに及んで法嗣
の公海は將軍家綱の援助を得て、寛文五年
(1665)山科の現在地に寺領を賜わり、堂宇
を整えた。この経蔵は寺伝によると天和二年
(1682)に完成したが、そこには天海版大蔵
経が二百九十の函に納められている。一函に
二帙乃至三帙が納められており、その帙の芯
紙に宗存版が使われていた。表紙となっている
茶色の厚手の紙には天海版の試し摺りに使
われたと思われる紙が使われていた。最初見
た時は同類の試し摺りかと思ったが、肉太の
書体であり違和感を覚えていたが、刊記の部
分をみるにおよんで、それらが宗存版である
事が判った。そこにはいままでには知られて
いない

七佛八菩薩所説神呪經

過去現在因果經(図版2)

大吉義神呪經 元和七年

などの経典が使われていた。

また、更に驚くべきことは、「東叡山」の
墨書(図版3)や「東叡山日記」(慈眼大師
全集下)を補うものと思われる墨書がその帙
の芯紙に使われていた。

天海版大蔵経が完成してから、毘沙門堂の
経蔵ができるまでは33年ほど経過しているわ
けだが、これらのことから初期に摺られた
天海版の大蔵経であることがわかる。宗存と
天海は同じ天台沙門としての交流の有無は別
として、天海がかなり宗存の大蔵経刊行の事
業を意識していたことは理解できる。

三、天海版大蔵経の完成

日本で最初に大蔵経の出版を完成させたの
は天台宗の天海である。大変長命で108歳で
亡くなられたと一説には伝えられているが、
寛永二十年(1643)に亡くなっている。寛永
十四年(1637)にはじまり12年を費やして慶
安元年(1648)に出来上がった。木活字を用
いて一紙24行四折の折本仕立、一面6行、一
行17字を基本としている。木活字は木片1個
に一字を刻み、部首別に分類整理しておく、

底本となる經典に基づき一字一字集字して、それらを一枚の板のようにするために隙間を埋める材を用いて締めつけて摺りあげる。この方法だと初めに何部印刷するのかを決めていれば、校正も簡単で、版木を堆く積み上げる置き場所にも困らない。木活字を分類収納する箱のスペースで済んでしまう。現在上野の寛永寺にはその木活字を含め約28万個が残されている。短所は一度摺りあげてしまうと、解版してしまうためあとから摺り増ししたい時は、もう一度組版仕ささなければならぬことである。

目録の上から宋版に基づいているといわれ、底本は川越喜多院の蔵本を使い、茨城県最勝王寺の宋版を校合に使ったといわれている。なお、喜多院の蔵本は宋版思溪版を主とし元普寧寺版もはいたった混合蔵である。摺本からみると、明の万曆版も一部に使われている。

さて慶安元年に出版された天海版一切経最後の「最」箱にある「日本武州江戸東叡山寛永寺天海版一切経新刊印行目録」全五巻とそれを翻刻した「昭和法宝目録」所収の目録が一般によく引用されているが、共に誤りがある。1453部6323巻としているが正しくは目録を含め1454部5781巻である。ただし般若心経などの同巻の經典もそれぞれ1巻と数え、目録も含めると6323巻となる。また、經典の順序や經典名なども目録と摺られた經典とは相違する。

經典をみると、活字を組む「うへて」と呼ばれる植字者の名前が紙継ぎ部分の左右の端に小さい活字で摺られている。また表表紙の内側に「久兵衛折」「折手長三郎」などの名前もままた見える。函数六六五というのは必ずしも厳密な規格があったわけではない。山科毘沙門堂の函数は二九〇の函に納められており、青蓮院と叡山文庫所蔵の天海版はともに六六五函であるが、函内の經典は少しずつれており、一致していない。

また、白紙の部分、言い換えると活字が印刷されていない部分が2箇所ある。それは四十巻本『華嚴經』の第十九巻第十紙と『佛説七俱胝佛母准提大明陀羅尼經』第一巻第十一紙とである。いずれも、底本となった本に落

丁などの問題があり活字を組めなかったことが予想される。さらに本文のなか、一字もしくは複数字印刷されていない箇所がある。

- ①『摩訶僧祇律』第27巻第21紙3行目第2字3字「布薩」の欠字
- ②『舍利弗問經』第8巻第17紙5行目第7字8字の2字空白。
- ③『阿毘達磨大毘婆沙論』第19巻第17紙6行目、第1字より第7字の「異熟問若異類而」の欠字
- ④『阿毘達磨大毘婆沙論』第114巻2紙6行目第5字6字の2字「云何」の欠字
- ⑤『佛本行集經』第18巻第5紙24行目第3字の「我」の欠字

などである。これらの箇所も底本の虫食いや版木の欠けによる欠字などが予想され、底本特定の手がかりとなる箇所である。

印刷部数については、現存の部数から推定すると、多くとも三十部程と考えられる。もともと、天海版一切経の出版意図は『徳川実紀』に（『大猷院殿御実紀』<新訂増補国史大系第四〇巻>五三八頁上下）

これは御神いまだ世にましませし時、慈眼大師の願により、東叡山にて開版命ぜられたる一切経、此ごろ全部剞劂の功をなしければ、五百余函を神前の西方に陳設して、備ふる所なり。

とある。願文にあるように家光の「武運長久」や「吉祥如意」、あるいは国の安泰や五穀豊饒にあったとしても、どこにどのように納めようとして、この刊行が始まったのかは分からない。製本の時期をみると、『徳川実紀』に慶安元年四月、家康の三十三回忌の法要に天海版一切経が奉納されたことを記している。また東西両本願寺や青蓮院にも翌年までには納められているが、京都山科本圀寺は完成から三十五～三十九年後の貞享から天和年間にかけて製本されたことが、わかっている。

天海版一切経には刊記とともに願文が摺印されている。総数三百二件あり、天海が亡くなる寛永二十年（1643）までの刊記は七年間で僅か二九件であったが、翌年から五年間で二七三件と完成を急いだことがわかる。

願文のうち最初のもは、仏の教えではなく、六派哲学のサーンキヤ学派の学説が書か

れている『金七十論』であって寛永十四年十二月十七日の日付である。そこには、(図版4)

奉再興 佛説一切經藏
 今上皇帝 玉體安穩
 東照權現 倍增威光
 征夷大將軍左大臣源家光公武運長久
 四海泰平 國家豐饒
 佛法紹隆 利益無窮
 日本武州江戸東叡山
 山門三院執行探題前毘沙門堂門跡
 大僧正天海願主
 寛永十四年丁丑曆十二月十七日

林氏幸宿花溪居士葉行とある。このなかで重要と思われる三点を指摘することができる。

まずは、第一行目の「奉再興 佛説一切經藏」という文言である。再興というからには初興を意識している訳であって、宗存版一切經を念頭においての文言であろう。なお、この「再興」とするのは全一六四件で正保三年四月六日までの願文で、以後は「奉彫造 佛説一切經藏」である。

第二点目は願文を大きく分けると家光公の武運長久を願うものから吉祥如意を願うものに変って行くことである。それは正保二年十一月二十九日の願文と同年十二月二十六日の願文であって、願文はこの両日を境にはっきりと分れるのである。

第三点目は最後の慶安元年の願文に記されている慈眼大師号についてである。慶安元年四月十一日、後光明天皇勅し、天海墓前にて勅使慈眼大師の追号の勅書を読むことが『徳川実紀』につきのように書かれている。

この日 勅使五條少納言為庸日光山天海の墓に参向して、慈眼大師の追号給はりし勅書をよむ。これは傳教、弘法、慈覺、智証の後は、七百余年其ためしなき事なれども、今この大師は、神祖こと更御帰依たるをもて、勅許せられしとの趣なりき。

しかし天海版一切經の慶安元年三月十日と十七日の両日の願文(4件全部)には既に慈眼大師号が使われている。すると、すでに約一カ月前には決定していたことがわかる。

四、黄檗版

日本で最初の流布版の大藏經を完成させたのは黄檗僧の鉄眼(1630-1682)であった。彼は日本に流布している大藏經のないことを嘆き、その出版を思い立ち、宗祖隱元から明の万曆版をもらい受けた。寛文十一年(1671)より刻藏がはじまり天和元年(1681)一応の完成をみる。

全藏ではないが延宝六年(1678)製本がおわった黄檗版大藏經が後水尾上皇に献上され、さらにそれは日野正明寺に下賜された。その版本は重要文化財として昭和32年(1957)2月19日付で48275枚が指定されている。

版本による出版は一枚の板に活字を刻んだもので、黄檗版は大概をいえば、約横82cm、縦21cm、厚さ1.8~2cmの節のない桜材の板に片面2面、表裏合せて4面分が刻んである。一面は一行20字、20行で中央の部分は版心といって、上から三藏などの分類、典籍名、巻数、丁数、千字文巻次などが刻まれている。このことは、方冊本に綴じられているから、版心により直に読みたい經典の箇所を探し出すことができるので、従来の折本や卷子本、あるいは粘葉装本などとは比べものにならない位、読む人にとっては便利な装幀であった。それは底本である明の万曆版そのままを踏襲したもので、整版で方冊本ということは、はじめから多くの人々に大藏經を読んでもらうために便利なものを鉄眼は考えてのことと思われる。目録でいえば明万曆版正藏の覆刻のみをもって黄檗版というが、それだけではない。完成を急ぐためか、安価にするためか和刻本を入れ版したり、『万曆版』正藏には入藏されていないものを出版したりしていることがわかってきた。いま一つ特筆すべきは『麗藏』を底本とした出版のあったことである。

これは、真言宗新安流の祖であり、梵学を復興した僧としても名高い浄嚴覺彦(1639-1702)が鉄眼に出版依頼したものであった。『浄嚴大和尚行狀記』の延宝二年(1674)の条に、

此時ニ当テ黄檗山鐵眼道光禪師大ニ化門ヲ開キ、大藏經ヲ梓行シテ黄檗山宝蔵院

ニ納ム。吾師、信ヲ通ジテ其道投合ス。藏中ノ秘密經軌ヲ別ニ目錄ヲ出シ、藏中ノ欠本十卷ヲ加ヘ居シメ、諸人ニ求メシムルカ故ニ、天下ニ諸儀軌ヲ持スル者六百余人ナリ。

とあって、二人の親交を記している。浄厳は真言宗の基本となる儀軌に関する『仏説秘密儀軌衆法經總目』という目録をつくり、その普及をはかった。そこで刊行されつつある『槃蔵』によって儀軌典籍を揃えようとしたが、そこに入蔵もされておらず、和刻本にもない典籍を鉄眼に頼んで新しく開版してもらっている。

この目録は『大日本仏教全書』95巻159頁に翻刻がある。浄厳の要請であるから、高野山の『麗蔵』を使用した可能性が高いと思われる。いまその目録に挙がっているもののうち、巻末に、

高麗国大蔵都監奉 勅雕造

という記載のあるものをあげると、

金剛頂瑜伽一字頂輪王一切時處念誦成仏儀軌 一卷

十地經 九卷

大集大虚空蔵菩薩所問經 八卷 (図版5)

修習般若波羅蜜多菩薩觀行念誦儀軌 一卷

觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門 一卷

大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴王經 三卷

の六部二十三巻である。

また、高麗版底本では、鉄眼初刷りの後水尾天皇に献上したものの中に「十住毘婆沙論」が含まれている。この第一巻末に「癸卯歳高麗国分司大蔵都監奉勅彫造」とあり、第十七巻末に「寛文六丙午年開板」とある町版である。法然院本は万暦版の覆刻であることを考えると、鉄眼在世中に十住毘婆沙論は入れ版を改めたと考えられる。

このような底本の出入はあるが、一般に黄檗版といわれる明万暦版正蔵の分については275帙に納められ、頒布された。たいした資金も、後立てとなる協力者もなくはじめられた大蔵経の刊行は、鉄眼の情熱とそれに応えた人々の合力で完成した。これらの協力者に

ついては黄檗版大蔵経の刊記に、どこの国の、誰から、いくら寄進されたのか記されている(図版6)。天和元年(1681)のことで、その年は飢饉があり、鉄眼は難民救済のための施財協力のためにしたためた手紙が残っている。

こうして出来上がった黄檗版大蔵経は大蔵経請去總牒という初期の販売台帳のような本によれば405蔵もが全国各所に納入されたという。また全蔵漸請千字文朱点という宝蔵院に所蔵されている台帳によれば2225箇所にのぼる黄檗版大蔵経の所蔵者の名前と納入時期などが記されている。それによれば、配本は一度に行われるのではなく数回に分けているのが一般的で、中には十数回に及ぶところもあった。製本の関係もあるが、代金の支払も考慮にいれれば、当然のことといえよう。

275帙1654部6995巻ともいわれているが、これは明の万暦版正蔵のみの部数と巻数で、そこに入蔵されていない鉄眼が浄厳の要請によって出版した秘密儀規の一部や蔵外典籍、語録類などははいっていない。さらに重要なことは、明の万暦版正蔵に入蔵されている經典のなかにも、はじめ町版を使って摺られたもののなかに、後から万暦版をもとに開版していくのであって、摺印時期によって変遷があることである。このことは、鉄眼版=黄檗版=明万暦版(正蔵)では決してない。鉄眼が出版した大蔵経の目録さえないというのが正しい認識である。

五、近世の大蔵経の校訂

近世の大蔵経の出版は宗存・天海・鉄眼の三人でつくるが、大蔵経の刊行とくに流布版の黄檗版大蔵経の普及により全蔵にわたるテキストの校訂が行われた。そのはじめは法然院中興第二世の忍淑(1645-1711)である。彼の伝記によると、刊行途中の黄檗版の『大乘本生心地観経』を読んでいたところ文意の通じない箇所が多々あった。偶々安然和尚の著した『普通授菩薩戒廣釋』に引用する経文と比較すると、果たして漏脱があった。いろいろ黄檗版大蔵経の経文を閲して意味の通じない箇所のある毎に、黄檗版大蔵経と善本とを対校して誤りを正していきたいと思ってい

た。そこで建仁寺の高麗版大藏経と黄檗版大藏経との対校を決め、江戸芝増上寺より直絃を上首とする学生十余人をよびよせた、という。

その事業は高麗版と黄檗版とを比べ、朱筆で黄檗版にその相違点を記入する方式で、正確を期すために一卷について三人が校正していった。宝永三年（1706）二月十九日にはじまり、足掛け五年の歳月を費やし宝永七年四月に対校事業を終えた。

忍激の事業は単に『黄檗蔵』を『高麗蔵』に対校したことによってのみ評価されるべきではない。同等に評価されるべきはその対校録の出版である。それには大分して二種類ある。

①相違した点のみを出版する校正部
②『黄檗蔵』に入蔵がなく、かつ『麗蔵』に入蔵の典籍を出版する欠本補欠部
従来対校録は①の校正部のみであったかのように言われてきたが、②の欠本補欠部も重要である。まず、校正部は全百巻の出版予定であったが、法然院を中心に実際に確認できたのは五六巻までであるから、それ以上の出版はなかったとおもわれる。

般若部

三巻三冊 通巻一～三（図版7、8）

宝積部

四巻四冊 通巻八～十一

大集部

五巻五冊 通巻十二～十六

華嚴部

四巻四冊 通巻十七～二十

涅槃部

三巻三冊 通巻二十一～二十三

重訳経部

十二巻十二冊 通巻二十四～三十五

単訳経部

十巻十冊 通巻三十六～四十五

小乗経阿含部

七巻七冊 通巻四十六～五十二

小乗単訳経部

三巻三冊 通巻五十三～五十五

宋元入蔵経部

一卷一冊 通巻五十六

欠本補欠部のなか第一に挙げられるべきは慧

琳撰『一切経音義』百巻（元文三年1738）と希麟撰『統一切経音義』十巻（延享三年1746）の刊行であろう。また儒学者服部南郭（1683-1759）はその貴重な所以を述べ、さらに、明治初期には清国駐日公使の楊守敬（1839-1915）が本国に貴重な典籍として紹介している。その上に民国二年（1913）には上海から出版されたという。1986年にも上海古籍出版からこの法然院蔵版本を影印出版している事によっても後世への影響の大なることがわかる。その注目すべきは編纂者の一人宝洲が序に於て、

雒西五智峯如幻空大徳、東都敬首律師嘗竭心思為之（音義書）校閲。然於高麗原本間亦非無字句譌脱倒置衍騰等差。今概存原本不敢妄点竄。

と述べていて、実際に少しく直している点である。『麗蔵』だからといって無批判に出版した訳ではないことがわかる。

そのほか、同様の出版として、つぎのものがある

① 光讚経 二巻 竺法護訳

この經典は『黄檗蔵』にも『高麗蔵』にもともに十巻本として入蔵されているが、出版の理由は『麗北兩蔵相違補欠録』に、

此光讚経一部十巻北蔵展麗蔵前八巻而為十巻以為一部而実欠後第九第十之兩 卷故写其兩卷而補北蔵之所欠者也
とあるように、巻九、十の二巻を出版したものである。

②根本説一切有部毘奈耶藥事 十八巻 義浄訳

③根本説一切有部毘奈耶出家事 四巻 義浄訳

④根本説一切有部毘奈耶安居事 一卷 義浄訳

⑤根本説一切有部毘奈耶随意事 一卷 義浄訳

⑥根本説一切有部毘奈耶皮革事 二巻 義浄訳

⑦根本説一切有部毘奈耶羯耻那衣事 一卷 義浄訳

⑧六趣輪廻経 一卷 馬鳴集日称等訳

⑨諸法集要経 十巻 觀無畏集日称等訳

⑩福蓋正行所集経 十二巻 龍樹集日称等訳

⑪父子合集経 二十巻 日称等訳

⑫東方最勝燈王陀羅尼経 一卷 闍那崛多訳

⑬別訳阿含経補欠 一卷

（明本第七巻末婆耆闍減尽次麗本更有此一巻）

⑭福力太子因縁経 一卷一冊 施護等訳

この經典は『黄檗藏』には三卷、『高麗藏』には四卷本として入蔵されているが、出版の理由は『麗北兩藏相違補欠録』に、此經北藏唯有上中下三卷麗藏忽有四卷然対北本於麗本北本但以麗本前三卷分为上中下而実欠此第四卷故今写録之者也とあるように、第四卷のみを出版したものである。

⑮ 仏説難陀計淫嚙囉天説支輪經 一卷 法賢訳

⑯ 無能勝大明王經 一卷 法天訳

⑰ 金光王童子經 一卷 法賢訳

⑱ 尼乾子問無我義經 一卷（右自四紙至八紙小卷） 馬鳴集日称等訳

このような忍激のおこなった事業は、善本で希少な高麗版と流布版として購入されていた黄檗版とを対校したにとどまらず、その対校録を出版して、黄檗版を読む人が高麗版をも合わせ読めるようにしようとしたことである。

ところで、大蔵經の校合は忍激だけではない。文政九年（1826）より天保七年（1836）まで越前浄勝寺丹山順芸は息子二人らと共に、やはり建仁寺の高麗版と黄檗版との対校事業を興し完成させている。翌年天保八年九月に建仁寺が出火し大蔵經もごく一部を残し焼失したことで、ただちに東本願寺は十一月に丹山にその対校の副本を作るよう命じている。現在の大谷大学図書館所蔵の対校本はその副本である。

遡れば、写經の時代から、たえず經典は善本との対校をして受け継がれてきた。中世においては写經の功德とともに対校の功德などもあった。このような善本を重んじる伝統を近世においてもみることができる。

妙心寺では寛文年間において蔵經設備を決定し、なにを大蔵經として求めるかの撰定の議があったことを伝えている。その議にかかわった龍華院竺印は天海版には誤字或いは横倒の不都合があるといい、最終的に建仁寺の高麗版を謄写することにした、という。美濃より特注の紙を摺らせた大事業である。これなども天海版のいくつかの經典を校訂した上での判断と考えられる。このとき黄檗版は事業が始められたばかりの時期であった。

おわりに

以上、近世の大蔵經を概観し、忍激を中心とした対校事業の影響をのべた。この時代は宗義・宗派を究めようとする宗学が盛んになった一方、各宗派間の論争や、それらの枠をこえて仏教を根本から理解していこうとする学僧を輩出した時代でもあった。それを育んだ土壤には黄檗版大蔵經の出版があり、根本には求法・弘法の本質があった。さらに明治、大正と大蔵經が出版されているが、そこでも黄檗版大蔵經や忍激の対校事業が利用されていることを忘れてはならない。

（まつなが ちかい）

参考文献

小山正文「宗存版一切經ノート」（『同朋仏教』20・21合併号）（昭和61年5月）

滋賀県教育委員会『延暦寺木活字関係資料調査報告書』平成12年3月

水上文義「新指定重文・延暦寺蔵『宗存版木活字』について」（『天台学報』43号 平成13年11月）

佛敎大学通信教育部『仏敎書誌学』

追記

研修会二日目、花園大学図書館のご尽力により、妙心寺山内をご案内いただき、特別に經蔵を見学することができました。高麗版を端正に写經した教典を手執ることができたことは、大変貴重な体験で関係各位の皆様へ尽々の謝意を申し上げます。